北海道銀杏会　第23回講演会

日時　2015年10月29日（木）18時30分～20時30分
場所　釧路ふく亭　櫂梯楼　パルコ店
講師　社会医療法人医仁会　中村記念病院　理事長・院長　中村　博彦　　様

本日は、講師に中村記念病院の理事長兼院長でいらっしゃる中村博彦様をお迎えし、「脳梗塞の予防と治療」と題してご講演をいただきました。

脳梗塞は脳の血管がつまる病気ですが、脳ドック受診が本質的な予防ではありません。脳梗塞の発症リスクは高血圧、高コレステロール血症、糖尿病などの成人病により増大します。中村先生は本日の結論として「成人病への日頃からの健康管理が何よりも大切である」とお話されました。認知症への予防も全く同様であり、日本人の平均寿命が伸びているなか、その重要性は益々高まっています。さらには、格差社会によって十分に医療サービスの提供を受けられない方が増えることを懸念されました。

当日は、手書きの絵図も準備いただいてのお話であり、専門的な事柄についても大変わかりやすい内容でした。日本トップクラスの名医のお話を直接お聞きできる貴重な機会とあって、参加者の皆さまからも真剣な質問が数多くなされ、時が過ぎるのを忘れるほど盛況な講演会でした。ご講演いただきました中村先生とご参加された会員の皆様に、厚くお礼申し上げます。

１．脳卒中について

（１）脳卒中とは

重度の介護を必要とする方の半数以上は、脳卒中と認知症が原因です。ある日突然発症し、死や重い障害が残る可能性のある病気です。脳卒中の類型は、脳梗塞76%、脳出血18.5%、くも膜下出血5.6%です。

脳梗塞には血管内にコレステロールが付着して狭くなることを原因とするアテローム性脳梗塞、ラクナ梗塞などのほか、不整脈により心房内にできた血の塊が運ばれて脳血管でつまるものもあります。これを心原性脳塞栓と言います。

（２）糖尿病や高血圧など

高血圧や糖尿病は、人類の長い飢餓の歴史を通して身につけた仕組みが、現在の飽食に対応できないために起こります。血糖を上げる仕組みはたくさんありますが、下げるホルモンはインスリンのみです。また塩分や糖を腎臓で再吸収する仕組みはありますが、高血圧の原因とされる塩分を直接体外に出す仕組みはありません。

そのため、飽食の時代には成人病への健康管理をしっかりとする必要があります。

（３）発症年齢

高齢化の進行により７５歳（心原性脳塞栓は８０歳）がピークです。

２．治療

（１）ＡＣＴ　ＦＡＳＴ（Ｆａｃｅ，Ａｒｍ，Ｓｐｅｅｃｈ，Ｔｉｍｅ）

脳梗塞も出来るだけ早く治療することが重要です。大変効果的なＴＰＡを用いた血栓溶解療法が10年前に認められました。ＴＰＡは発症後3～4時間半以内であれば投与が可能です。全国で救急体制が整備され、札幌は最も進んだ地区として、当時の朝日新聞に紹介されました。

小渕元首相、長嶋茂雄氏、田中角栄元首相なども、この療法を受けていれば運命が違っていただろうとのことです。「顔がゆがむ」「手に力が入らない」「ろれつが回らない」は危険信号です。しばらく様子を見てからなどと躊躇せず、救急車を呼んでくださいとのことです。

（２）治療法の進歩

最近は血栓を回収する最新システム（Penumbra システム）が開発されるなど脳血管内治療が大きく進歩しています。発症した際に、早急にしかるべき脳卒中センターに駆け込むことで予後は大きく変わります。つまり、「住んでいる場所」「駆け込んだ病院」「担当医」によって運命が変わるとのことでした。

３．認知症

認知症患者は 2025 年には 700 万人、65 歳以上の 5 人に 1 人となり大きな社会問題になると予想されています。認知症の原因はいくつかありますが、脳血管の障害を原因とする割合は、半分以上にもなるとのことです。従って、成人病の健康管理をすることは、脳梗塞の予防のみならず認知症の予防にもつながります。

（文責　　渡辺　知博）